

広島城(鯉城, 在間城, 当麻城) (国史跡, 百名城, 三大平城)

(広島市中区基町) (広島城址公園)

広島城(ひろしまじょう)は、広島県広島市中区基町にある日本の城跡。国の史跡でもある。

概要

日本 100 名城の一つ。最も広がった時代の曲輪のうち内堀に囲まれた本丸と二の丸と三の丸の一部が現存し、広さ約 12 万 m²。大坂城や岡山城らと共に初期近世城郭の代表的なものである。名古屋城、岡山城と共に日本三大平城とも言われる。

江戸時代では西日本有数の所領となった広島藩 42 万 6000 石の太守浅野家 12 代の居城となり、江戸時代中期に書かれた『広島藩御覚書帖』で知るところでは、5 重と 3 重の大小天守群以下、櫓 88 基が建てられていた。1598 年に毛利輝元によって創建された大天守は、1945 年に倒壊するまで現存天守の中では岡山城天守に次ぐ古式を伝えるもので、下見板張りや最上階に高欄を持つ外観の仕様は国宝保存法下の国宝指定 (1931 年) の理由の一つとなった。

近代は軍都広島を中心施設であった。日清戦争時に、本丸に大本営が置かれたという稀有な歴史を持っている。アメリカ軍による広島市への原子爆弾投下の際には破壊目標地点となった。また天守は原爆による爆風で吹き飛ばされたのではなく、建物の自重により自壊したことが近年の研究で判明している。

周辺は都市開発により城跡の面影はなく、城址公園域以外で確認できる遺構は、広島高等裁判所敷地内にある中堀土塁跡と、空鞆橋東詰南側の櫓台石垣程度である。

広島市中央公園内の一施設であり、広島城全域が広島城址公園 (ひろしまじょうしこうえん) となっており、復元された大天守は歴史博物館として利用されている。公園全体は公益財団法人広島市みどり生きもの協会が、博物館 (天守閣) は公益財団法人広島市文化財団が指定管理者として、広島護国神社は同神社、堀は広島市がそれぞれ管理している。

別称

別称は「鯉城 (りじょう)」。広島城があった一体は昔「己斐浦」と呼ばれ、広島市西区己斐の地名は延喜式で嘉字地名とされる前は「鯉」であったと言われていることから、この名がついた。一説には堀にたくさん鯉がいたからとも、天守が黒いからとも言われる。その他、「在間城 (ざいまじょう)」、「当麻城 (たいまじょう)」の別称がある。

現存する資料の中で鯉城の名前が使われた最も古い資料は江戸時代の終わりごろ、頼聿庵が読んだ漢詩の一節

「原文不明 (振り返れば鯉魚の城)」

— 頼聿庵、

である。由来については江戸時代に書かれた資料はなく、現在一般的に知られる由来は明治時代以降の資料からである。よって一部では鯉城の由来は明治期に考えられたと唱えるものもある。

2003 年、中区八丁堀の国土交通省中国地方整備局太田川河川事務所での発掘作業で、「鯉の金箔瓦」が 1 点出土している。金箔が施されていることから毛利氏時代のもの (下記金鯉瓦の項もあわせて参照) と推定されているが、天守と関係あるものかは不明。

鯉城通り、鯉城会館、鯉城高校 (現広島県立広島国泰寺高等学校)、鯉城グループなど、市内中心部にある施設に鯉城を冠した名前が多い。また鯉城から「広島東洋カープ」(英語で鯉が CARP) のチーム名が付けられた。ちなみにカープが毎年シーズン前に必勝祈願へ訪れる広島護国神社はこの城址公園内にある。

歴史

前史

この地は太田川下流域にあたり、上流から堆積した土砂が三角州を形成し、中世には小島や砂州に小規模な集落が点在していた。

承久の乱以降、その戦功により安芸国守護に命じられた武田氏により当地は治められていたが、戦国時代になると毛利元就が武田氏を滅ぼし厳島の戦いで陶氏（大内氏）に勝利したことにより、以降当地は毛利氏によって支配されることになる。

それまでの毛利氏の居城である吉田郡山城は、尼子氏の大軍を撃退した経験を持つ堅固な山城であり、また山陰・山陽を結ぶ場所に位置するため、領土の争奪戦を伴う戦国時代の毛利氏には適していた。ただ毛利輝元時代の天正末期になり天下が安定する頃になると、それまでの防護を主目的とした城造りから、城を権力の中心としてシンボル化しその周りを城下町として整備し領国の政務・商業の中心地として発展させる「近世城郭」建築の時代になる。中国地方9か国120万石の太守であった毛利氏にとって、山間部の山城である吉田郡山城は、政務および商業ともに手狭なものとなり始めた。そこで、海上交易路である瀬戸内の水運が生かせ、城下町の形成が可能な平野がある海沿いへ拠点を移すことを考え始めた。

1588年（天正16年）、輝元は豊臣秀吉の招きに応じて小早川隆景や吉川広家らと上洛し、大阪城や聚楽第を訪れ近世城郭の重要性を痛感し、新しい城を造ることを決意したと言われている。一説には永禄年間（1558年-1569年）の輝元の祖父である元就のころから現在の広島市の平野部（一説には比治山）への築城構想はあったという。

「中国国分」も参照

築城

1589年（天正17年）2月、輝元は現地調査のため吉田郡山を出発し、明星院山（現東区二葉山）・新山（現東区牛田）・己斐松山（現西区己斐）の3箇所に登り太田川下流域を検地した結果、「最も広い島地」である五箇村（あるいは五ヶ村・佐東五ヶ）に築城することに決めた。

1589年（天正17年）4月15日鋤入れ式。穂井田（穂田）元清と二宮就辰を普請奉行として、築城が開始された。城の構造は大坂城を参考として、縄張は聚楽第に範を取っているといわれ、縄張を秀吉の側近で築城の名手である黒田如水が思案した。如水が築城に絡んだ理由として以下のことが現在語られている。

- この築城は同時期に進行しつつあった秀吉の朝鮮出兵に於ける前線基地となった名護屋城と、秀吉の拠点である大阪城や聚楽第を海路で繋ぐ中継基地（秀吉の宿泊所）としての期待をされたため、秀吉が築城技術のサポートとして側近の如水を派遣したという話。
- 全く平らな低湿地帯へ築城することに決まった際、家臣団の中で比治山山頂に築城する案と揺れた。そこで輝元の叔父である小早川隆景の友人である如水にアドバイザーとして参加を依頼した。如水は堅城となりうるとして低地案を推進し縄張を考案した。後日、秀吉がこの城を見物し「要害が悪い。水攻めをされたらひとたまりもない。」と評価した。輝元は如水に騙されたと憤慨したが、隆景は「要害の悪い城だからこそ安全。毛利の城の要害が良かったら、謀反の恐れあり、と警戒される。」と諫めた。そこから秀吉は毛利氏を弱体化させるため（浅瀬に築城したため島普請に相当な出費をしたことから）如水を派遣した、という話。

「島普請」と言われる、川の中州の埋め立てと堀の浚渫が初段の大工事で、困難が予想されたが輝元自身が意欲的に奨めた（下記島普請の項も参照）。1590年（天正18年）末、堀と城堡が竣工したことから、1591年（天正19年）1月8日に輝元は入城した。1592年（文禄元年）4月、文禄の役を指揮するため名護屋城へ向かう途中の秀吉がここへ立ち寄って城内を見物している。1593年（文禄2年）石垣が完成、1599年（慶長4年）に全工事が完了し落成した。なお「広島」という名はこの頃に付けられたと言われている（詳細は広島市#市名の由来参照）。

完成当初は、堀は三重に巡らされ馬出を多数備える実戦的な城構えで、当時の大坂城に匹敵する規模の城だったといわれるが、関ヶ原の戦いで滅封されて広島を去った毛利輝元に代わって、1600年（慶長5年）城主となった福島正則による改築があり、築城当時の広島城がどのような姿であったかについての詳細は不明である。

藩政時代

「広島藩」も参照

福島氏時代、穴太衆を雇入れ、毛利氏時代に不十分だった城の整備および城下町づくりが本格的に行われた。外郭が整備され、内堀・中堀・外堀のある約1キロメートル四方の広大な城となったのはこの頃である。二葉の里付近から城の北側を通っていた西国街道を城下の南側を通るように付け替えるとともに雲石街道を整備したといわれ、町人町が拡大した。この大規模な城整備と城下町作りは徳川家康を怒らせ、1609年（慶長14年）正則は謹慎を言い渡されている。さらに、1619年（元和5年）、正則は洪水による被害の修復を幕府から武家諸法度を破った無届け改築ととがめられ、改易され信濃国川中島へ転封された。同1619年（元和5年）8月8日、浅野長晟入城以降は浅野氏の居城となり、明治時代に至るまで12代約250年間続いた。

武家諸法度の縛りがあるため容易に改修できないことから、広島城の改修は福島氏の段階で完了していたと考えられていたが、近年の調査で一部の櫓台石垣は浅野氏時代に構築されたと判明している。浅野氏時代には城普請はほぼ行われなかったが、大規模な干拓事業は引き続き行われ、約250年間で当初の域より5から6倍規模にまで広がった。また洪水にたびたび悩まされており、洪水被害やそれを修復した記録が多数残っている。地震の被害にもあっており、1624年（寛永元年）安芸国を震源地とした地震では石垣や多門・櫓・塀などが崩壊したことを最初に、以降数度地震災害の記録が残っている。

1864年（元治元年）第一次長州征討の際、徳川慶勝を総督とする幕府軍の本営となる。この際、慶勝によって撮影された幕末の広島城の写真が現在徳川林政史研究所に残る。戊辰戦争になると広島藩は官軍として戦ったため、城に被害はなかった。つまり、築城から江戸時代の間、この城は戦の舞台にはならなかったことになる。

近代

1871年（明治4年）7月14日、廃藩置県。浅野氏による藩政体制は終りをつけ広島県が発足し、本丸に広島県庁舎が設置された。同年12月、本丸に鎮西鎮台（のちの熊本鎮台）第一分営が置かれると県庁舎は三の丸に移転した。1873年（明治6年）1月、広島鎮台が正式に発足し、以降広島城には大日本帝国陸軍の施設が建てられるようになる。1873年（明治6年）3月、三の丸に兵営が置かれると、県庁舎は国泰寺へ移っていった。1875年（明治8年）4月歩兵第11連隊設置、同年6月西練兵場設置。一方で解体や火事により江戸時代の建物は失われており、特に1874年（明治7年）本丸および二の丸で起こった火災では、本丸御殿が全焼した。

1887年（明治20年）、広島の開基地ということから、旧城廓内であるこの地を正式に「基町」と名付けられたと言われている。

1888年（明治21年）5月、広島鎮台は第五師団に改編されると本格的に軍としての機能を拡大させ、広島市は軍都として近代都市へと発展していった。当時は基町全域が軍用地であった。

1894年（明治27年）7月、日清戦争が勃発すると城内に広島大本営が設置される（設置理由など詳細は広島大本営を参照）。同年9月15日から1895年（明治28年）4月27日まで明治天皇は広島に行幸した。これに伴い第7回帝国議会も広島で召集され、短期間ながら臨時首都として機能した。なお、大本営解散の後には「史蹟明治二十七八年戦役広島大本営」として保存されていた。当時、従軍記者として訪れた正岡子規は1句残している。

春暁や 城あらはるる 松の上

1897 年（明治 30 年）4 月、広島陸軍地方幼年学校（のちの広島陸軍幼年学校）が城内に設置される。日清戦争および日露戦争以降、広島市は爆発的に人口増加していき、その中で広島城の堀の悪臭が目立つようになる。そこで明治 40 年代になると市により外堀や城下町時代の運河として使われていた西塔川や平田屋川の埋め立てが始まり、1911 年（明治 44 年）11 月外堀埋立完了、1912 年（大正元年）西塔川埋立完了、1915 年（大正 4 年）平田屋川埋立（減幅して溝に）完了した。その埋め立てられた土地には、1912 年から 1918 年（大正 7 年）にかけて道路（相生通りや鯉城通り）や広島電気軌道（広島電鉄本線・広島電鉄宇品線・広島電鉄白島線）が整備されると、旧外堀の一部は繁華街となっていった。その中で広島城の歴史的価値を見出され、1926 年（大正 15 年）10 月大本営跡が史跡指定。それまで軍の敷地であったことから立入禁止だったが 1928 年（昭和 3 年）天守の一般開放が開始されている。1931 年（昭和 6 年）1 月天守が国宝保存法の国宝（旧国宝）に指定される。

構造

縄張

「総構え」も参照

藩政時代の広島城は、福島正則が輪郭式平城として整備したものであり、内堀・中堀・外堀のある約 1 キロメートル四方の、広さ約 90 万平方メートルの規模があった。広島城を中心とした絵地図では東西南北を基準に整備されている様に書かれているが、上記空中写真および左絵地図の東西南北表記でも分かる通り実際には約 18 度時計回り方向に傾いている。その理由について書かれた文献はなく、当時の本川（旧太田川）と京橋川そして城北川（下記島普請参照）に囲まれていた地形的制約から配置が決まったものと推定されている。

『広島藩御覚書帖』によるそれぞれの曲輪の規模は以下のとおり（間および町は尺貫法単位）。

二の丸は「馬出」と呼ばれる曲輪で、広島城の特徴の一つである。毛利氏による築城当初は存在せず後の改修により造られたもので、1598 年（慶長 3 年）から 1600 年（慶長 5 年）の間に造られたと考えられている。外堀は、南端が今の相生通り、北端はほぼ城南通り、東端が白島通りの 1 本西側の道路で北側の一部が白島通りに一致し、本川を西側の外堀と位置づけていた。また正則は、ここより西の大名（主に周防長門へ転封した毛利氏）からの攻撃を想定し、特に西側を増強している。それは本川沿いの櫓数や西側の馬出で伺い知る事ができる。更に本川を挟んだ西側には城の防衛目的（安芸門徒に対して）で町割りに本願寺広島別院などの寺を集中させ寺町を作っている。

広島市には城が由来の地名が残っている。「八丁堀」「薬研堀」などの地名は堀があった名残である。八丁堀の「京口門」バス停留所は、城から東方向（京都）へ向かう門があった場所にある。本通りは毛利氏による城下町整備の際にできた通りである。大手町通り北端、現在の紙屋町西交差点あたりに大手門があった。

鬼門にあたる二葉山には藩主の加護により多くの神社仏閣が建てられ、明星院（輝元の生母妙寿院の位牌所）、広島東照宮や饒津神社、尾長天満宮・国前寺（以上浅野氏関連）、などが置かれた。裏鬼門や四神相応については曖昧で、裏鬼門を己斐松山（旭山神社）や厳島（厳島神社）など諸説唱えるものがある。なお天守正面から見て似島の安芸小富士がやや左手に見えていた。

島普請

島普請とは、現在で言う地盤改良と堀の浚渫、築堤工事のことを指す。

当地は太田川下流域三角州の低地にあり、低湿地帯の砂地上に城を築くために「千本杭」と呼ばれる木杭を砂地盤に打ち込んだ上に基礎を築いた工法が採用されたと伝えられてきた。ただ近年の発掘ではその証拠が見つからないことから、実際に行われたか否定的な意見を唱えるものもある。ちなみにこの千本杭は厳島神社大鳥居の基礎に用いられている。

城址公園以外で当時の島普請で現存しているものとしては、旧太田川（本川）の本川橋橋脚下の石組が著名である。

北側の外堀がその他の外堀と違って蛇行しているのは川をせき止めて整備されたためである。毛利輝元による築城当時その川は「城北川」と呼ばれており、城の北側にあたる現在の白島地区は築城以前は「箱島」と呼ばれる島（中州）であった。毛利氏の次に入城した福島正則は、城北川が洪水で氾濫した場合、城下に深刻な被害を与えると判断し、治水対策も含めて川を外堀として再整備し、東側は完全にせき止め西側は堀の取水口として樋門を設けた、とされている。ちなみに福島氏の次の広島藩主である浅野長晟は入城翌年となる1620年（元和6年）、城北川東側のせき止めた地点つまり旧城北川と京橋川の合流点付近に「縮景園」を造園している。

浅野氏が支配した250年間で洪水にたびたび悩まされており、洪水被害やそれを修復した記録が多数残っている。

戦前から同地に建っている福屋八丁堀本店本館は、相生通りに面して平行ではなく少しズレた状況で建っている。これは外堀を埋め立てた際に整備された当時の相生通りに対して平行に建てられたためで、戦後に相生通りを整備した際にズレる形となった。つまり福屋本館は広島城の外堀に対して平行に建っていることになる。

天守

「天守」も参照

初代

1592年（文禄元年）4月、文禄の役に参加した常陸佐竹氏家臣の平塚滝俊は、名護屋城に向かう際に休憩のため立ち寄った広島城の天守や石垣を見て「見事なること申すに及ばず候」と書簡に残していることから、天守はこの年以前に建てられたものと考えられている。更にこのソースが発見されたことより、同時期に文禄の役を指揮するため名護屋城へ向かう途中で立ち寄った豊臣秀吉はこの天守に登って見物したと考えられている。

連結式と呼ばれるもので特に複合連結式ともいい、五重の大天守から渡櫓で南と東に2つの三重小天守を連結するものであった。大天守の高さは『広島藩御覚書帖』によると、17間6尺（約32.7メートル）あった。望楼型で黒漆塗りの下見板が張られた壁面は豊臣秀吉の大坂城天守を模したともいわれ、屋根には金箔押の軒瓦や鬼瓦（金箔瓦）が葺かれていた。その一方で、内部は天井も張られずに丸太の梁が剥き出しであった。藩政時代において天守はほぼ物置として使われており、築城から江戸時代の間この城自体は戦場にはなっておらず、戦中は旧陸軍の重要書類が多数積み込まれていたことから、終始倉庫として利用されていたことになる。

1837年（明治6年）以降、経緯は定かではないが小天守は撤去され、天守群は大天守と付属する一部の渡り櫓が残った。1958年現在の大天守入口前広場が南の小天守と渡櫓の跡にあたり、東の小天守台には基礎が残っている。1931年（昭和6年）、他の現存する建造物とともに国宝保存法の国宝（旧国宝）に指定されていたが、1945年（昭和20年）のアメリカ軍による原子爆弾投下の影響によって倒壊した。倒壊の様子について原子爆弾投下の際には、爆発時の熱線に耐えたものの、その直後の爆風による衝撃波と圧力により下部2層が上部の重さに耐えきれず倒壊、間もなく上部3層も崩落し、大量の建材が天守台や北東の堀に散乱した、ということが近年の研究で判明している。倒壊後はしばらくそのまま放置されている。建材のその後に関しては定かではないが、生活に困窮した市民が使用したという証言があるほか、被爆者を救済するため、瀬戸内海の製塩業者に建材と塩を広島市が交換したともいう。このことは広島原爆戦災誌など市の公式資料には一切記されていない。

2代目

1951 年（昭和 26 年）、広島国体開催に合わせて仮設の木造天守閣が建てられた。天守を博物館として利用し始めたのはこの頃からである。夜はライトアップされ、アトラクションとして天守の周りを「スイッチバック・レールウェイ（木製のジェットコースター）」が設置された。竣工時期は不明である。大型台風のスーパースタインにも耐えたが、国体終了と共に取り壊された。

3 代目（現在）

現在の大天守は 1958 年（昭和 33 年）に「広島復興大博覧会」が開催された際、外観復元された。各階層の高さは右表のとおり（単位はメートル）。総事業費約 3,600 万円。施工は藤田組（現フジタ）。再建するにあたり、以下の方針がとられた。

- 初代天守を忠実に再現する。
- 最上階で市内を展望できるようにする。
- 博物館として利用する。

火災対策のため、木造から SRC 造に変更している。自重増加のため天守台を補強することになりモルタルグラウトにより栗石を固めた。瓦を復元する際には、堀に沈んだものを探したり、古い広島城のものを新聞紙面上で募集するなどしている。

最上階のみを木造での復元としたり、懸魚の形状を古写真に基づくものではなく創建当初のものを想定するなど初代天守の忠実復元を試みていた一方で、窓の意匠について本来、突上窓であるものを連子窓（格子窓）として復元したり、南廊下の 1 階・2 階に窓を新たに開けるなど、戦災以前の外観とは異なる部分が指摘されている。

本丸御殿

藩主が生活し政務を行った本丸御殿は、本丸上段つまり本丸の北大部分を占める場所に位置した。上記の通り、1874 年（明治 7 年）本丸および二の丸での火災により全焼したことから、現存はしていない。跡地には大日本帝国陸軍関連（広島鎮台→第 5 師団司令部）から広島大本営が建てられたがそれらも被爆により全焼している。

1996 年（平成 8 年）から始まった本丸発掘調査により基礎石などが発見されているが、それらは露出させず埋戻している。絵図が数枚残っていることから、模型資料などで復元されている。

余談だが、江戸藩邸の上屋敷の方は当時霞が関にあり、歌川広重『名所江戸百景』「春の部 2. 霞がせき」に描かれている。

櫓

「櫓（城郭）」も参照

藩政時代における広島城の特徴として、広さ約 90 万平方メートルの広大な城域を取り囲むように 88 基の櫓が置かれたことが挙げられる。『広島藩御覚書帖』による各曲輪の櫓基数は、本丸 23 基、二の丸 5 基、三の丸 17 基、外郭 43 基。上記の通り特に西側を増強し、本川（旧太田川）に沿って 11 基もの櫓が二重に建てられその間を塀で結ばれている。

1624 年（寛永元年）の地震、1854 年（嘉永 7 年）安政南海地震の際に、櫓が崩れた記録が残っている。明治以降になりこれらは取り壊されたことと、被爆により、江戸時代以前から現存する櫓は存在していない。ほとんどの櫓の位置は現在不明であるが、近年の発掘調査によりいくつか判明している。

二の丸の平櫓・多聞櫓・太鼓櫓および表御門は、1989 年（平成元年）から行われた改修の際に再建されたものである。施工は砂原組。これらはつながっており、全部の櫓内部を見学できる。

城址公園以外で櫓の位置がわかるものとして、本川左岸側の空鞆橋東詰南側にある「外郭櫓台跡」の捨石遺構がある。1979 年に広島県教育委員会が発掘調査し、刻印が入った石垣が発見されている。

遺構

大本営跡/昭憲皇太后御座所

石垣

1589 年（天正 17 年）8 月、毛利輝元は家来に堀の工事と石材の収集を命令したと伝えられている。

石材の殆どは緻密で硬いことから花崗岩が用いられている。瀬戸内海は良質な花崗岩の産地が多いことから主に沿岸部から運び込まれており、近年の調査で黄金山や江波山（この当時は島だった）、倉橋島、周防大島などの島々からも運び込まれたと判明している。

本丸北東付近、本丸上段東端の不規則につまれた状態で途切れている石垣は、福島正則の改易騒動を史実的に裏付けるものと考えられている。正則が改易される少し前に、幕府は一度条件付きで正則を許している。その条件の一つに修築した石垣の破壊が盛り込まれていた。この部分は正則が破壊した石垣の境界部分と考えられている。

広島市への原子爆弾投下の際に、内堀の一部石垣が崩れていることが米軍の空中写真により分かる。表御門や中御門にある石垣の一部に焦げたような跡があるのは被爆により発生した火災によるものである。

周辺の都市開発や発掘調査により出土した旧堀の石垣の一部は、別の場所で再構築されモニュメント化されている。また城址公園付近の地下道や紙屋町シャレオの一部では、出土した石垣を内装板として再利用している。

堀

上記の通り、明治期に外堀が、戦後昭和 30 年代までに中堀が埋め立てられ、現在は内堀のみが残る形である。紙屋町・八丁堀周辺の歩道に、外堀があったことを示す石碑が建っている。

1970 年代以降、祇園新道、1994 年アジア競技大会会場整備、広島高速交通広島新交通 1 号線、紙屋町シャレオなど周辺の土地開発工事の際に発掘作業が同時に行われており、断片的ではあるが堀の詳細が判明している。

戦後、外堀中堀と埋め立てられたせいで内堀は循環機能を失った“ため池”となり、更に周辺の都市開発の影響により地下水位が低下したことから内堀は枯れ始め、富栄養化も目立つようになる。様々な対策が行われたが、アジア大会開催を機に抜本的な対策が取られることになった。それは、旧太田川（本川）から川水を取水し、内堀まで導水、循環させ、再び本川へ流出する導水路および流水路の建設工事で、建設省（現国土交通省）と広島市による共同事業となった。現在、城址公園西側の広島市中央公園芝生広場内に流れる 2 本の“堀川”は水路の地表部分である。またこれら導・流水路および内堀は、一級河川旧太田川を本流とする準用河川に指定されている。

金鯱瓦

2009 年（平成 21 年）3 月、広島市中区上八丁堀の広島地方合同庁舎 5 号館建設による前調査の際に、金鯱瓦が一对発見された。発見された場所は、本丸から見て東側の中堀と外堀の間に位置していた武家屋敷にあたり、井戸跡の底に大量の瓦と共に埋まっていた。ほぼ完全な状態での金鯱瓦出土は国内初で、更に日本でも古い部類の鯱瓦にあたることから、完品として現存最古の金鯱瓦である。

発見された珍しい瓦は以下のとおり。これらは築城当時の毛利氏時代のものと推定され、地下水に浸っていたため腐食しなかったと考えられている。

- ほぼ完全な形の金鯱瓦一对
 - 高さ約 70 センチ×幅約 30 センチ。粘土製で、下地として黒漆と赤漆が塗られており、安土城の鯱瓦に似ている。本丸櫓門の棟上に飾られていた金鯱瓦と推定されている。また当時京都で作られていた一般的な鯱瓦よりも技術的に低いことから、広島で作られたものではないかと推測されている。
- 金箔の施されていない鯱瓦一对
 - 高さ約 40 センチ。
- ホタテ貝の模様の入った瓦

- 鬼瓦
- 家紋と見られる印が入った瓦

金箔瓦が作られた当時の豊臣政権下において、この瓦は「権威の象徴」とみなされ設置は秀吉の許可が必要だった。また豊臣政権下でのこの瓦は朝鮮や明からの使者に日本の栄華を見せつけることを主目的としたため、同時代に築城した北部九州から大阪にかけての城でいくつか出土例があり、県内では厳島神社でも出土している。

井戸跡に埋められていた理由について、三浦正幸広島大学教授は「毛利輝元が防長2国に移封された後に広島城に入った福島正則が本丸櫓門から取り外し、城主交代を広く知らしめるために、儀式的な意味で丁重に井戸に沈めて埋納したのではないかと推測した。これは、これら瓦が井戸の中で雑に投棄されていたのではなく、丁寧に積み重なる状況だったことも根拠の一つである。

Wikipedia による

